

優秀賞

## 曾祖母の体験

千葉県 佐倉市立井野小学校六年 橋本 柊子

「これが、その手紙だよ。」

ていねいに筒の中から白い紙を取り出し、パラパラと曾祖母は開いた。私は、この夏休み、曾祖母が体験した戦争の話を聞くことができた。今、曾祖母が開いたのは、曾祖母の兄が出征する時に家族に書いた手紙のコピーである。

「これ、何て書いてあるの。」

私は、思わず曾祖母に聞いた。手紙の文字は、筆のようなもので書かれていて、となり同士の文字がつながって何と書いてあるかわからなかったからだ。曾祖母は、ゆっくりとゆっくりと手紙を読んだ。いとおしむように、かみしめるように読んだ。気づけば、いっしょに曾祖母の家に来ていた、祖母や母や弟も熱心に話を聞いていた。いつのまにか私達は、曾祖母が体験した戦争の世界へと引きこまれて行った。

次に曾祖母は、『知覧特別攻撃隊』と書いてある本と、表紙がすれて古そうな赤色っぽいようなアルバムを取り出した。『知覧特別攻撃隊』という本には、一ページだけはしが折られているページがあった。

そのページには、曾祖母の兄の名前と亡くなった日が書かれていた。私は、ありえないと思った。自分の兄弟が戦争に行って、そこで亡くなるなんて考えられない。今まで戦争の本を読んできて、たくさんの方が亡くなったことは知っていたけれど、自分の身内ぐらいはちゃんと帰ってくるものだと思っていた。改めて戦争の恐ろしさを思い知った。

表紙がすれた赤色のアルバムには、集合写真があった。中心には、若い男の人がいた。

「この方は私のお兄さんだよ。」

と、曾祖母は言った。話を聞くと、曾祖母の兄が十九才の四月ごろ、知覧特別攻撃隊に志願したそう

だ。この写真はその時のもので、手紙もその時書いたらしい。写真には、曾祖母の両親や曾祖母が写っていた。

出征が決まってから、曾祖母の兄はもう涙を流さなかった。いつも、いつも、笑顔だった。私は、今までがまんしていたものがあふれた。涙でかすんで、何も見えない。きっと、曾祖母の兄はずっとこらえていたのだろう。曾祖母も、両親もきつとこらえていたにちがいない。

いよいよ出征の日。曾祖母は、バスに乗った兄を見送ったという。その時、曾祖母は、バスに乗った兄が自分に向かって、

「がんばれ。」

と言ったような気がしたそうだ。だからか、いつも祖母は言う。

「戦争はしちゃいけないよ。して、得ることは何も  
ないんだから。」

私も、本当にそう思う。今、私達は幸せだけど、昔、日本で戦争が起きたし、他の国で戦争に苦しめられている人がいる。だから、私が曾祖母という立場になった時、私が伝え聞いた話を、孫達に伝えられたらと思う。

